

これまでの活動報告・ニュース

高等研究院研究者育成特別プログラムが「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」プログラムに採択される

平成18年度科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」プログラムに、高等研究院の提案課題「名大高等研究院研究者育成特別プログラム」が採択されました。

高等研究院研究者育成特別プログラムは、自然科学系全分野にわたる若手研究者を対象とし、国際公募・選考を経て採択される全員が卓越した研究成果をあげ、テニュアを得ることを達成目標として掲げています。

本プログラムで育成した若手研究者が、学内の各部署に異動し、力を発揮して成果が得られれば、本学にテニュア・トラック制度による高度研究の雰囲気浸透していくと期待されるだけでなく、高度な自立研究能力と研究者倫理を備えた研究者が広がることで、全国の人材システムの改善にも貢献できると考えられます。

インターナショナル・アドバイザー・ボード(国際諮問委員会)が開催される

この度、第1回名古屋大学インターナショナル・アドバイザー・ボード(国際諮問委員会:略称IAB)が、平成18年2月6日(月)と7日(火)の両日、名古屋マリオットアソシアホテルで開催されました。

IABは、名古屋大学の学術研究と教育の更なる充実と発展を図るために総長の諮問機関として大学に設置され、ノーベル賞受賞者3名を含む国内外の著名な学識経験者7名の国際諮問委員で構成されています。本学の研究・教育活動の現状等について国際的水準に照らした評価に基づき、各委員から助言や提言を受けることが目的です。初回にあたる今回は、高等研究院の組織と運営のあり方、および今後の方向性と展望などに関して様々な発言をいただき、2日間のIAB日程を大変有意義に終えることができました。

IAB初日には、平野総長による歓迎挨拶の後、野依委員(理化学研究所理事長、本学特別教授、初代高等研究院長)が議長に選出されました。次いで山本副総長と北住院長による名古屋大学および高等研究院の概要と研究活動等の説明、そして続いて高等研究院教員候補者若手3名による研究発表が行われました。これを受けて、野依議長の司会により高等研究院のあり方について活発な意見交換が行われました。初日の議論の焦点は、野依議長が掲げた次の5項目でした。

1. 名古屋大学における特に優れた研究の認知
2. 最先端研究および萌芽的研究の支援
3. 学際的・国際的交流の触発と振興
4. 大学の学術研究について独立した立場から見識ある助言を大学に与えること
5. 一般社会における科学の重要性の認知と理解の促進

IAB2日目は、初日の議論を踏まえて、高等研究院に対する提言が各委員から活発になされました。議論の焦点はより具体的な次の4項目に移りました。

1. 高等研究院研究プロジェクトの促進と評価のあり方
2. 高等研究院における研究環境のあり方
3. 高等研究院の研究成果の発信のあり方
4. 高等研究院の組織と運営のあり方

議論では、名古屋大学のプレゼンスを高めるために高等研究院の存在意義が強調されました。さらに、本院運営の方針や方法の見直しも議論され、学術的素養を有する専門職員や事務職員の配置、国内外の優秀な研究者を効果的に招聘ないしは雇用して人的交流を活発化することの必要性、将来性の高い研究者、特に卓越した若手研究者を発掘するための評価基準の策定などに関わり、多彩な意見が寄せられました。

今回のIABで行われた議論の結果は、野依議長によって「総長への提言」として最終的にまとめられる予定です。

International Advisory Board委員(アルファベット順)

赤崎 勇 博士

1981名古屋大学教授、2001名城大学特任教授、1995化合物半導体国際会議賞及びH. Welker金メダル受賞、1997紫綬褒章受章、2004文化功労者顕彰

IGNARRO, Louis J. (イグナロ, ルイス ジェイ) 博士

1979チューレン医科大学教授、1985UCLA医学部教授、1994ラッセルUCLA賞受賞、1995チバ高血圧研究奨励賞受賞、1998ノーベル医学生理学賞受賞、2004名古屋大学名誉博士

池端 雪浦 博士

1989東京外国語大学教授、1998人文学名誉博士(フィリピン大学)、2001東京外国語大学長、2001文部科学省科学技術・学術審議会委員

李 遠哲 博士

1973シカゴ大学教授、1974カリフォルニア大学教授、1994台湾中央研究院院長、1986米国科学メダル受賞、1986ノーベル化学賞受賞、2003名古屋大学名誉博士

野依 良治 博士

1972名古屋大学教授、1997名古屋大学理学研究科長、2003理化学研究所理事長、2000文化勲章受章、2001ウルフ賞受賞、2001ノーベル化学賞受賞

STÜNER, Rolf (シュテュルナー, ロルフ) 博士

1976コンスタンツ大学教授、1981シュトゥットガルト・カールスルーエ高等裁判所判事、1993オーストリア・スイス・ドイツ民事訴訟法学会会長、2000フライブルク大学法学部長、2001ハーバードロースクール客員教授

ZINK, Michel (ザンク, ミシェル) 博士

1964パリ高等師範学校入学、1976トゥールーズ大学教授、1987ソルボンヌ大学教授、1994コレージュ・ド・フランス教授、2000フランス学士院会員、2000コレージュ・ド・フランス副学長

■会議日程

2月6日(月)

- 9:30 開会:平野総長
- 10:00 名古屋大学の概要、研究活動等の説明・質疑応答
- 10:45 高等研究院の概要の説明・質疑応答
- 13:30 高等研究院の研究活動の説明・質疑応答
 - 福井 康雄 教授 [物理学分野]
 - 近藤 孝男 教授 [生命科学分野]
 - 磯部 稔 教授 [化学分野]
 - 佐藤 彰一 教授 [文系・社会科学分野]
- 15:40 若手研究者による研究プロジェクト提案説明・質疑応答
- 16:50 高等研究院に対する意見(司会:野依議長)
- 18:00 終了

2月7日(火)

- 9:30 高等研究院についての提言案とりまとめ(司会:野依議長)
- 11:30 閉会:平野総長・北住院長
- 11:40 記者会見

■関連新聞記事のリスト

日付	International Advisory Board 関連記事	新聞社名
2005.9.30	2006年2月に国内外のノーベル賞受賞者など学識経験者で構成する「インターナショナル・アドバイザー・ボード」設置 議長に理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授	日本経済新聞(朝刊)
2006.2.6	国際レベルの提言を 野依氏ら出席 名大諮問委が初会合	朝日新聞(夕刊)
2006.2.6	高等研究院の活動 議論 名大国際諮問委が初会合	中日新聞(夕刊)
2006.2.7	名大の教育・研究 国際水準に ノーベル賞学者ら助言 諮問委が初会合	読売新聞
2006.2.7	名大国際諮問委が初会合 ノーベル賞学者らで構成	日本経済新聞(夕刊)
2006.2.8	高等研究院に優秀な若手必要 名大国際諮問委が提言	朝日新聞(朝刊)
2006.2.8	「世界から人材を」 名大高等研究院 国際諮問委が提言	中日新聞(朝刊)
2006.2.8	名大国際諮問委初開催 ノーベル賞受賞者ら7人招き「外国人研究者の登用を」	毎日新聞(朝刊)
2006.2.8	研究者7人が評価 教育活動など 名大が諮問委	日刊工業新聞
2006.2.8	「外国人研究者 積極的登用を」名大諮問委が提言	読売新聞
2006.2.28	編集部から 名古屋大学が世界各国からノーベル賞級の研究者を集め、初めて開催した「インターナショナル・アドバイザー・ボード」(国際諮問委員会)について	中日新聞(朝刊)

森郁恵教授が受賞 女性科学者を顕彰する「猿橋賞」

「女性科学者に明るい未来の会」(会長・古在由秀県立ぐんま天文台長)は平成18年4月25日、自然科学分野で優れた業績を上げた女性科学者を顕彰する「猿橋賞」(第26回)を高等研究院の元教員森郁恵(大学院理学研究科教授、平成15年度研究プロジェクト採択)に贈ると発表しました。森教授は「学生のころ、自伝を読んだことのある猿橋先生の賞をいただけて、大変光栄です」と喜びを語られました。授賞式は5月27日、東京都千代田区の東海大学校友会館で開催されました。

今回、森教授の「感覚と学習行動の遺伝学的研究」に関わる研究成果が評価されての受賞となりました。ヒトの脳は約1000億個の神経細胞できています。記憶・学習、情動、認識といった複雑な脳のはたらきはそれらの神経細胞の回路網に依存しています。脳のはたらきを理解するためには多面的に神経研究を行うことが必要であり、統合的に脳機能を理解することが重要です。森教授は1mmという小さな線虫(Caenorhabditis elegans)をモデル生物として用いて記憶と学習の神経メカニズムを世界に先駆けて研究し、多数の優れた研究成果をあげました。線虫は、餌のある条件で培養してから餌の無い温度勾配の場に移されると、先程まで餌のあった培養温度に集まる温度走性を示します。すなわち、温度と餌条件を記憶・学習します。線虫の神経系が302個の神経細胞からできていることと、それらの結合パターンが解剖学的に分かっていることに着目し、森教授は、記憶と学習が支配するこの温度走性について、脳機能の理解に不可欠な神経回路動態の解析に焦点を当て、温度走性の神経回路モデルを提唱しました。このモデルは、動物の学習に結びつく神経回路として全生物を通じて最初に

決定されたもので、現在、味覚や嗅覚、視覚などの感覚や動物行動に関する多くの教科書や専門書に引用されている重要な成果です。

また森教授は、分子生物学的な手法を導入し、温度走性に異常を示す突然変異体の解析から、温度走性に関与するシグナル伝達経路や、神経回路機能の鍵となる分子を発見しました。神経回路の機能が、刺激の種類や強さに応じてどのように変化するかを分子レベルで理解することは、現在の脳神経研究における最も重要な課題の一つと考えられています。この観点から森教授は、最近、神経細胞の活動に応じて異なる波長の蛍光を発するカメレオンと呼ばれるモニター分子を用いて、温度走性の神経回路を構成する神経細胞のイメージングにも成功しています。また、詳細な行動解析をおこない、温度走性が記憶に支配されていること、また、餌のあった温度に集まるだけでなく、餌の無い温度からは逆に遠ざかるという行動が、餌や温度との連合学習によって成立することなども実験的に明らかにしました。

これら一連の研究は、線虫の分野に留まらず、感覚や学習行動の分子神経遺伝学的な研究としても国際的に見て高く認知されており、森先生は今後もめざましく活躍の場を広げられると予想されます。古くからモデル生物として脚光を浴びてきた線虫ですが、日本の代表的な線虫研究者として先導的な役割を果たし、独自の研究分野を切り拓いてきた森教授の功績は絶大だと国内外で評されています。平成16年度の高等研究院フォーラムと第12回高等研究院セミナーでもこの研究についてご説明いただきました。先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。(平成18年4月26日(水)の日経、朝日、読売等に関連記事あり)



受賞式で一教え子に囲まれて—
(撮影者:伊藤 知彦 助教授)

高等研究院スーパーレクチャーが開催される

さる平成17年9月8日(木)、高等研究院の「第1回スーパーレクチャー」が野依記念学術交流館2階のカンファレンスホールにて開催されました。

このレクチャーは、世界最高水準の研究者を招聘しての講演(招待レクチャー)と高等研究院での採択研究プロジェクトが終了した高等研究院教員による研究成果の発表(高等研究院レクチャー)の2部で構成され、国際的に最先端をゆく学術活動の一端を広く社会に伝えることを目的として開催されました。

初回であるこのレクチャーでは、北住炯一高等研究院長の趣旨説明、山本進一理事(研究・国際交流担当)による挨拶の後、田上英一郎高等研究院副院長を司会として、招待レクチャーでは、かつて名古屋大学に関係され、素粒子研究の分野でノーベル賞級との評価を受けている益川敏英氏(京都大学名誉教授)の「真理へのアプローチ、媒介項は何か」と題した講演がおこなわれました。益川氏は、科学研究における画期的飛躍が何によってもたらされたかを、主に専門の素粒子物理学分野を事例に、ユーモアあふれるエピソードを交えながら、研究者にとって他者と「議論すること」の重要性など、多くの示唆に富む内容をお話されました。

また、高等研究院レクチャーでは、岡田猛氏(元教育発達科学研究科、現東京大学・助教授)の「芸術家の創作過程」、家森信善氏(経済学研究科・教授)の「東海地域の金融システムの特徴と課題:名古屋の金利はなぜ低い?」、有本博一氏(元理学研究科、現東北大学・教授)の「多剤耐性菌と闘う」、楠見明弘氏(元理学研究科、現京都大学・教授)の「細

胞中の一分子を見る、触る」、そして丹羽公雄氏(理学研究科・教授)の「顕微鏡でニュートリノの種類を見分ける」の5つの報告がなされ、高等研究院での研究成果が披露されました。

聴講者は本学の教職員・学生・一般市民など、のべ200名を超え、熱気溢れる雰囲気となりました。レクチャー終了後の懇親会では、講師の方々に加えて、さまざまな分野の研究者が参加し、専門分野を超えての活発な議論がなされました。

■高等研究院第1回スーパーレクチャーのプログラム

日 時 平成17年9月8日(木) 13:00~17:30

会 場 野依記念学術交流館 カンファレンスホール

第1部 招待レクチャー

13:00~13:15 挨拶および講師紹介

13:15~14:30 講演と質疑

講 師 益川 敏英 氏

(京都産業大学・教授、京都大学・名誉教授)

講演題目「真理へのアプローチ、媒介項は何か」

—科学研究における画期的飛躍は何によってもたらされたか。歴史の中にその手がかりを探る—

第2部 高等研究院レクチャー

14:40~15:10 岡田 猛 氏(元教育発達科学研究科、現東京大学・助教授)

「芸術家の創作過程」

15:10~15:40 家森 信善 氏(経済学研究科・教授)

「東海地域の金融システムの特徴と課題:名古屋の金利はなぜ低い?」

15:40~16:10 有本 博一 氏(元理学研究科、現東北大学・教授)

「多剤耐性菌と闘う」

(休憩 20分)

16:30~17:00 楠見 明弘 氏(元理学研究科、現京都大学・教授)

「細胞中の一分子を見る、触る」

17:00~17:30 丹羽 公雄 氏(理学研究科・教授)

「顕微鏡でニュートリノの種類を見分ける」

懇親会

17:40~19:30



高等研究院フォーラム2005が開催される

さる平成17年11月25日(金)、文系総合館カンファレンスホールにおいて、「高等研究院フォーラム2005」が本学の教職員・学生・一般市民など、約60名の参加を得て開催されました。

このフォーラムは、高等研究院に属する優れた研究者たちの研究成果を広く学内外に発信するとともに、特定の研究テーマを取り上げ、研究者間で意見交換を行うことを目的としています。今回は、「アジアの共通理解と総合的支援体制」と題して開催されました。

本フォーラムでは、北住炯一高等研究院長の挨拶の後、和田壽弘氏(高等研究院運営推進委員、文学研究科・教授)を司会として、杉浦一孝氏(法政国際教育協力研究センター長)の「アジアと法整備支援」、近藤孝弘氏(高等研究院教員、教育発達科学研究科・助教授)の「東アジアの歴史問題への政治教育的アプローチ:その必要性と可能性」、田中重好氏(環境学研究科・教授)の「文化の翻訳:アジアにおける「公」と「私」の概念の比較」、多和田眞氏(高等研究院教員、経済学研究科・教授)の「東海地域の産業クラスター分析と東アジアの産業クラスターの形成」、そして中西聡氏(高等研究院教員、経済学研究科・教授)の「災害復旧を通じた近代化:関東大震災と百貨店」の5つの研究報告がなされ、アジアの共通理解の進展と、総合的支援体制の確立についての提言がありました。

これらの研究報告に引き続いてパネル・ディスカッションが行われました。司会は、長田博氏(高等研究院運営推進委員、国際開発研究科・教授)がつとめ、パネリストとしては、研究報告者の方々にコン・テイリ氏(法政

国際教育協力研究センター・助教授)が加わりました。奥村隆平高等研究院副院長がモデレーターとして参加し、アジア諸国における共同体的あり方や「公」と「私」の概念の違い、また、中国における企業活動の今後など、専門分野を超えての活発な議論がなされました。また、会場との活発な質疑応答も印象的でした。

■高等研究院フォーラム2005のプログラム

アジアの共通理解と総合的支援体制

日 時 平成17年11月25日(金) 13:00~17:30

会 場 文系総合館 カンファレンスホール

13:00~13:10 開会挨拶

研究報告

司会:和田 壽弘氏(高等研究院運営推進委員、文学研究科・教授)

13:10~13:45 「アジアと法整備支援」

杉浦 一孝 氏(法政国際教育協力研究センター長)

13:45~14:20 「東アジアの歴史問題への政治教育的アプローチ:その必要性と可能性」

近藤 孝弘 氏(高等研究院教員、教育発達科学研究科・助教授)

14:20~14:55 「文化の翻訳:アジアにおける「公」と「私」の概念の比較」

田中 重好 氏(環境学研究科・教授)

15:00~15:35 「東海地域の産業クラスター分析と東アジアの産業クラスターの形成」

多和田 眞 氏(高等研究院教員、経済学研究科・教授)

15:35~16:10 「災害復旧を通じた近代化:関東大震災と百貨店」

中西 聡 氏(高等研究院教員、経済学研究科・教授)

16:10~16:30 コーヒーブレイク

パネル・ディスカッション

司会:長田 博(高等研究院運営推進委員、国際開発研究科・教授)

16:30~17:30 パネリスト:研究報告者、コン・テイリ氏(法政国際教育協力研究センター・助教授)

モデレーター:奥村 隆平 氏(高等研究院副院長、経済学研究科・教授)

懇親会

17:45~19:30



平成17年度高等研究院セミナーの活動内容について

第9回 H17.5.24

循環と淘汰から見た将来の技術大系

武田 邦彦 工学研究科・教授

技術の進歩は常に警戒感をもって社会に受け入れられてきた。畑を耕すのに鉄製の鋤は良いものではあったが、鉄技術の高いヒッタイトは優れた武器でエジプトを襲った。技術が社会にとって両刃の剣であることは、産業革命、原子力、そして大量生産でも繰り返された。そして現在は技術をこれ以上進展させることが文明を破壊すると結論されている。

物質循環は化学反応の方向に沿い、自然淘汰であっても人工淘汰でも淘汰は強いものを作り出す方向性のある変化である。今まで変化そのものが終焉を目指す方向性を持っていることを覆すことができず、技術はその時間を早める役割を果たしてきた。

講演では生物と無生物の間に本質的な差が見られないことを実験も交えて整理し、知の働きが循環と淘汰の原理を覆すことが可能であるか、そして学術がそれを覆すなら技術大系はどうあらねばならないかを論じる。

マイクロ・ナノ・ロボットマニピュレーションの拓く世界

福田 敏男 工学研究科・教授

ロボット技術をナノテクノロジーの世界に 응용して、ナノロボット・マニピレータを電子顕微鏡内に作り、ナノ計測、ナノ加工、ナノアSEMBリーをするナノラボラトリーを構築する。このナノロボット・マニピレータは4ユニ

ットからなる16自由度を有するシステムで、粗と精な動作をするように設計されている。

このロボットシステムを自由自在に操ることにより、カーボンナノチューブ(CNT)をナノテクノロジーの素材として用いて、ナノ・センサやナノ・アクチュエータ、ナノ3次元構造物を作ることができる。ナノセンサーとしては近接センサーや流量センサー等、多層NTCを用いることによりテレスコピックなナノ・アクチュエータ等を作ることができ、これから各種ナノデバイスができる。

第10回 H17.7.26

アジア諸国に対する法整備支援

鮎京 正訓 法政国際教育協力研究センター・教授

日本政府は、政府開発援助の一環として、アジア諸国に対する法整備支援を、1996年以降開始し今日に至っています。法整備支援は、途上国に対する「知的支援」と位置づけられ、立法支援、法曹養成支援、法学教育支援から成り立っています。そして、このような課題に対応するため、文部科学省は、法整備支援事業および法整備支援研究を行うナショナルセンターとして名古屋大学法政国際教育協力研究センターを設立しました。報告では、本センターがこれまで法整備支援に取り組んできた、ベトナム、カンボジア、ラオス、ウズベキスタン、モンゴルなどを事例としてとりあげ、法整備支援の理念とは何か、という問題を中心にして、これまでの軌跡および今後の課題についてお話しします。



宇宙の構造から宇宙の起源を探る

松原 隆彦 理学研究科・助教授

宇宙の大規模な構造の観測は現在驚くべき進展を見せています。この結果我々の宇宙が、未知の物質であるダークマターや未知のエネルギーであるダークエネルギーに支配されていることがほぼ決定的になってきました。最近ではこれら宇宙のエグゾチックな成分量が十分定量的なレベルで明らかにされ、宇宙論のみならず素粒子論や相対論など基礎物理学の各分野にインパクトをもたらしています。本セミナーでは関連する我々の研究をまじえて、これら最近の宇宙論の進展を紹介し、近い将来どのような進展が期待されるかを展望します。史上最大の大規模構造探査プロジェクトであり、私も参加しているスローン・デジタル・スカイ・サーベイが現在進行中ですが、これにより明らかになりつつある宇宙の姿も紹介します。

第11回 H17.9.27

世界初の遠赤外線干渉計望遠鏡の開発

芝井 広 理学研究科・教授

遠赤外線干渉計FITE (Far-Infrared Interferometric Telescope Experiment) 計画について紹介する。これは1秒角程度の高解像力を目指す宇宙観測用の遠赤外線干渉計望遠鏡であり、科学観測用大気球に搭載して高空から宇宙観測に用いる。2006年にブラジル気球基地からの初フライトを計画している。

恒星誕生直前の原始星の温度構造、原始惑星系円盤の温度構造、および銀河核スターバースト周辺の温度構造を解明するためには、熱放射のピークが来る遠赤外帯においての高解像直接的観測はきわめて重要である。そこで、遠赤外帯において初めて基線長20mの干渉計を開発し観測に用いる。遠赤外線に対しては地球大気が全く不透明なので、科学観測用大気球を用いて干渉計を上空に浮遊させる。将来の大規模宇宙赤外線干渉計プロジェクトへの応用・発展が期待される。

超構造らせん

八島 栄次 工学研究科・教授

核酸やタンパク質などの生体高分子は、らせん構造に代表される特異な構造を形成し、時空間特異的に自己組織化することにより、生命維持に不可欠の高度な機能を発現している。これら生体高分子の最大の特

徴は、「分子認識能」と「触媒作用」、「情報機能(修復、複製、増殖能)」にあると言える。生体の仕組みに学び、その高度の機能を取り入れることによって新たな材料を創製することも可能となる。本講演では、独自の原理をもとに構築したらせん構造を基本骨格として、様々の化合物をらせん状に配列・制御する手法について、また、二重らせん分子やらせん集合体に至るまでの各階層を構築しうる方法論の開発や顕微鏡を用いたらせん高分子の直接観察等について、最近の研究例を中心に紹介する。

第12回 H18.2.28

分子ゆらぎのつくる生命プロセス

笹井 理生 情報科学研究科・教授

最近、酵素反応、シグナル伝達、分子モーターなど蛋白質の柔らかさを示す実験が次々に現れており、その本質をついた理論の登場が待たれている。大きなゆらぎの中で生体分子の特異性や高効率が発揮される理由、および、分子ゆらぎを積極的に利用して機能を発現する機構を考える試みを紹介する。また、細胞における遺伝子発現を定量的に測定する技術が発達した結果、遺伝子発現はゆらぎの大きい、確率的なプロセスであることが明らかにされた。大きなゆらぎの中で遺伝子スイッチとそのネットワークが安定に発現する機構を明らかにすることは理論にとって重要なチャレンジである。ゆらぎの中で働く生体分子システムを考えて確率的細胞生物学 (Stochastic Cell Biology) への道を探りたい。

行動を支配する神経回路のいとなみを知る

森 郁恵 理学研究科・教授

入力された外界からの刺激を、情報処理し、行動として出力するという一連のプロセスが、どのように行われているかを明らかにすることは、現代神経科学の大きな課題である。動物の神経系は、多数の神経細胞がシナプス結合でつながり、神経回路を形成することで成り立っている。線虫 *C. elegans* は、温度を記憶し餌条件と関連させて学習する。この温度学習のコアとなる神経回路をモデルシステムとして、記憶や学習すること、また、判断をくだすということは、どういう生物学的基盤の上に成り立っているのか。この問題について実験科学として研究することの意義について考える。また、ロボット線虫は作れるかについても議論したい。

人事について

専任教員の伊藤彰浩助教授が平成18年3月31日をもって任期満了となり、経済学研究科から蔡大鵬助教授が専任教員として着任しました。

また、運営推進委員の近藤孝男教授(理学研究科)が平成18年2月末日付けで、和田壽弘教授(文学研究科)、高橋雅英教授(医学系研究科)、中村研三教授(生命農学研究科)、長田博教授(国際開発研究科)が3月末日付けで退任されました。

新たな運営推進委員として、佐藤正俊教授(理学研究科)、山田弘明教授(文学研究科)、高橋隆教授(医学系研究科)、坂神洋次教授(生命農学研究科)、新美智秀教授(工学研究科)にご参画いただいています。

高等研究院院友制度が発足

高等研究院院友制度は平成18年6月から発足します。高等研究院院友は元高等研究院教員ならびに名古屋大学に關係する学外の優れた研究者で構成され、プロジェクト審査に関わるとともに、高等研究院のその他の活動の発展に寄与します。

運営費について

本院は現在のところ、学内措置による設置であるため、高等研究院運営費および研究プロジェクト推進経費を財源としています。平成17年度予算は主に、高等総合研究館の運営費や宣伝費、および本院のプロジェクト採択者と専任教員に割り当てられた後、有効に使われています。なお、本年度の予算執行の内訳は、2006年度の高等研究院年次報告で公表する予定です。



今後の活動予定とお知らせ

第2回高等研究院スーパーレクチャーの開催について

第2回高等研究院スーパーレクチャーを平成18年10月10日(火)に、野依記念学術交流館で開催いたします。高等研究院スーパーレクチャーは名古屋大学レクチャーと高等研究院レクチャーとの2部より構成されています。今回の名古屋大学レクチャーとして、フランス学士院会員、コレージュ・ド・フランス教授のミシェル・ザンク博士を迎え、「西洋における詩歌の源泉—中世吟遊詩人の歌とその解説書—」(フランス語、同時通訳付き)について講演をしていただくことになっております。講演前に総長からザンク博士にCertificateの贈呈も予定されています。

高等研究院レクチャーの部では、講師として、理学研究科の森郁恵教授、生命農学研究科の内田浩二助教授、工学研究科の笹井理生教授・新美智秀教授・武田邦彦教授、医学部保健学科の後藤節子教授の6名を予定しています。

プログラムなどの詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)とポスター、チラシなどで全学に向けて公開いたします。講師の先生方には、専門外の方々でも分かりやすい講演をお願いしてあります。皆様、奮ってご参加下さい。

高等研究院フォーラム2006の開催について

高等研究院フォーラム2006を平成18年12月5日(火)に、名古屋大学シンポジオンで開催します。今回のテーマは「より公正な科学研究へ向けて:業績の評価と研究倫理」(仮称)です。

昨今、研究世界の競争激化によって研究者の不正行為が顕在化し、この問題にいかに対応するかが問われています。こうした中で、学術会議は2003年6月に「科学における不正行為とその防止策」を発表し、これを受けて科学者の行動規範に関する検討委員会がガイドラインを策定しました。本学でも目下、倫理規範および倫理規定を検討中です。上記テーマに関するフォーラムを開催し、評価のあり方、不正行為の背景と防止策、研究倫理のあり方と倫理教育などについて多様な視点から意見を交換し、公正な科学研究を目指したいと考えています。

プログラムなどの詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)とポスター、チラシなどで全学に向けて公開します。興味のある方はぜひご参加下さい。

高等研究院セミナーの開催について

平成18年度には、本院教員先生を話題提供者とする高等研究院セミナーを3回開催します。詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)とポスター、チラシなどで全学に向けて公開します。講師の先生方には、専門外の方々でも分かりやすい講演をお願いしてあります。皆様、奮ってご参加下さい。

第13回 H18.7.25

生物時計分子装置の作動原理の原子レベルでの解明に向けて

石浦 正寛 遺伝子実験施設・教授

周産期女性のマタニティ・ブルーズおよび産後うつ病に関する文理複合的研究

後藤 節子 医学部保健学科・教授

第14回 H18.9.26

動物たちが季節を感知する仕組みを探る(仮題)

吉村 崇 生命農学研究科・助教授

ナノ構造の上に拓く新デバイスの世界(仮題)

水谷 孝 工学研究科・教授

第15回 H19.1.23

環境変化に対抗する生体膜装置(仮題)

魚住 信之 生物機能開発利用研究センター・教授

草稿を通して浮上する新しいソーシャル像について(仮題)

松澤 和宏 文学研究科・教授

「高等総合研究館」利用者の募集について

高等研究院の研究スペースと運営本部は、平成16年度より「高等総合研究館」(Institute for Advanced Research Hall: 通称IAR Hall)に確保されました。IAR Hallは静かな環境と多くの緑に囲まれており、研究するには最高の立地条件です。平成18年4月現在において全18研究プロジェクトが入居しています。この建物を基盤として、今後も本学の卓越した研究プロジェクトを重点的に推進していく予定です。引き続きIAR Hallには空きスペースが確保されているため、本建物利用に関わる全学公募を本年度は不定期に受付けています。なお、本募集内容や公募範囲面積、その他建物利用に関わる詳細につきましては、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/>)で全学に向けて公開中です。皆様からの積極的な応募をお待ちしております。



本院に関する詳細につきましては、高等研究院ホームページ(URL:<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)をご参照下さい。このURLから高等研究院パンフレットもご入用になれます。